

ふしぎな夜のうん動会

奄美市立屋仁小学校 三年 山原 佳怜

「やったあ、明日から夏休みだあ。」

わたしは、小学校三年生。毎年楽しみにしている夏休みがやってきた。わたしには、六年生のお兄ちゃんがいる。名前は、怜音。この夏、わたしとお兄ちゃんは、とつてもふしぎな体けんをしたのだ。

わたしが通う小学校は、山と海にかこまれた、しぜんがいっぱいな学校だ。夏になると、屋仁小学校では、ふしぎなことがおこるんだ。それは、昔から言い伝えられている屋仁小七ふしぎの一つ。「まん月の夜になると、だれもいないはずの小学校から、いろんな声や音が聞こえてくる。」という言い伝えだ。

ある日の夜のことだった。その日はとてもむしむししていて、ねむれなかった。わたしとお兄ちゃんは、二かいの部屋で話をしながらおきていた。すると、

「カリカリ、パタパタ。」

どこからか、きみような音が聞こえてきた。

「何の音かな。」

わたしはふしぎに思った。

「ねずみじゃない。」

と、お兄ちゃんが言った。そっか、わたしの家は、夜になるとよく屋根うらをねずみが走り回るのだ。

「カサカサ、スー、スー。」

こんどは、草むらがゆれているような音が聞こえてきた。

「こんどは、何の音かな。」

「ううん、なんだろう。ネコじゃない。」

とお兄ちゃんが言った。

「グワツ、グルルルルー、グルルルルー。」

こんどは、アヒルのような鳴き声が聞こえてきた。さすがのお兄ちゃんも「何だろう。」と首をかしげていた。

そして、いろんな音や鳴き声がどんどん大きくなってきた。わたしは、なんだかこわくなって、お兄ちゃんにしがみついた。でも、気になって、お兄ちゃんとおそろおそろまどからのぞいてみた。すると、海の方から、オカヤドカリの行れつやウミガメとウミガメの赤ちゃんたちが百ぴきくらいパタパタとお母さんのあとをおいかけて、学校に向かっていた。そして、山の方からは、クロウサギの兄弟やミミズクの家族が草むらをかき分けてピョンピョン、パタパタさせながらむかってくる。さらに、川の方からは、ハブの親子や親せきをつれたオツトンガエルのむれが「グルルルルー。」と鳴きながらつぎつぎと学校へむかっていた。わたしとお兄ちゃんはびつくりした。

「みんな学校にむかっているぞ。行ってみよう。」

とお兄ちゃんが言った。そして、わたしとお兄ちゃんは、そうっと、気づかれないようにウミガメの赤ちゃんの後ろをついていった。今日はまん月。月の光が、真っ暗な夜道を明るくして、電とうがなくても歩けるくらい明るかった。そして、みんなが学校の校庭に集まると、月の光は、まるでスポットライトのように校庭を明るくてらした。

「何が始まるのかな。」

わたしとお兄ちゃんは、ソテツの木にかくれてドキドキしながら見ていた。その時、

「ヒュルルルルルル。」

一羽のアカシヨウビンがとんできた。その鳴き声を聞いたみんなは、学校を正面にいつせいにならんだ。それぞれ海組・川組・山組に分かれてならんでいた。そして、みんなのうん動会が始まった。海ガメ対ハブ親子のつな引きや、オットンガエルの家族対クロウサギ兄弟のすもう対決、オカヤドカリ対ミミズクのリレーをしていた。だんだん空が明るくなってきたころ、またアカシヨウビンが鳴いた。「ヒュルルルルルル。」すると、動物たちはいつせいに帰っていった。

わたしは、ハッと目がさめた。わたしとお兄ちゃんは、いつの間にか家のふとんでねていた。

「あれはゆめだったのかな。」

お兄ちゃんと顔を見合わせて、ふしぎに思っていた。その時、コロン。何かがわたしのポケットから落ちた。

「ソテツのなりだあ。」

わたしとお兄ちゃんは声を合わせて言った。きつと、ソテツの木でかくれているときに入ったんだ。だから、きのうの出来事はゆめじゃなかったんだ。お兄ちゃんが、

「そういえば、昨日はまん月だったね。あれが屋仁小学校七ふしぎの一つだったんだ。まん月の夜にだれもない学校から音が聞こえてくるのは、あま美の生き物たちのうん動会だったんだ。」

とつぶやいた。わたしは、何だかとてもうれしい気持ちになった。そして、これからもあま美のしぜんや生き物を大切にしようと思った。また来年の夏、あま美の生き物たちのうん動会を楽しみに。